第70回（R5．10）

嗚呼　残留孤爺（こじい）

夏の名残が色濃く残る朝、男は食卓に着く。すると向かいに座った奥方から衝撃の宣告が。

娘と二人で旅行に行ってきます。

なんだって！どこに行くんだ？

離島に行ってのんびりしてくるわ。

どのくらい居るんだ？長いのか？

まあ一週間ほどかな。

オ、オ、俺はどうなる？

留守番お願い。少しは羽を伸ばしてもいいわよ。

数日後、男は残留孤児ならぬ残留孤爺となった。正真正銘の独居老人である。男は奥方が冷蔵庫に詰めておいた食材を、自ら調理し黙々と食べた。それでもたまにはお刺身など食べたいと、スーパーをのぞいてみる。

独りで籠をぶら下げて食品売場をうろつくのは、昭和の男としては抵抗感があるのだが、そんな時に限っておばちゃんたちに出会ってしまう。

「まあ、お珍しい。お独りでお買い物？」親しみの中にも好奇の眼差しを注がれているようで、まことにもって居心地が悪い。

この間幾度となく「羽を伸ばしても」という奥方の言葉が男の頭をよぎった。しかし、これはきっと俺を試すために仕掛けられた、巧妙な罠に違いない。その気になって後々バレたりすると、永久に独居老人になりかねない。そう思うと伸ばしかけた男の羽は無残にも縮んだ。